

学校法人 城西大学

JOSAI INTERNATIONAL CENTER

for the Promotion of Art and Science (JICPAS)

学校法人 城西大学

〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町3-26

☎03-6238-1300

http://www.josai.jp/

Newsletter

Newsletter for
International Exchange Activity
国際交流版

Josai University Corporation

3-26 Kioi-cho, Chiyoda-ku, Tokyo ☎03-6238-1300 http://www.josai.jp/

No.1



この祝賀会に先立ち、前日の25日には城西大学並びに城西国際大学の教員を交えての理事主催による夕食会が開かれ、和やかな雰囲気の中、意見交換が行われるなど、翌日に控えた祝賀会への順調な出だしとなりました。

会場にはカリフォルニア大学リバーサイド校(UCR)からデイビッド・ブロス氏、カモーン・カレッジからドーン・サザーランド・ディレクター、デニス・オカダ前ディレクターの2名、カトマンズ大学からシュレス・ラジ・シヤラマ副学長、東西大学から張聖萬理事長、朴東順学長、金大植教授の3名、大連工科大学外国語学院から杜鳳剛院長、延辺大学から金柄珉学長、真理大学から葉能哲学長(順序不同)と世界各国の姉妹提携校からお祝いにつけてくださいました。



学校法人 城西大学 創立40周年記念祝賀会

学校法人城西大学創立40周年記念祝賀会

2005年4月26日(火)
ホテルオークラ東京「曙の間」



記念祝賀会当日は、ホテルオークラ東京の「曙」の間に大勢の方々にお集まりいただきました。

た中、姉妹提携校からの来賓客を交えた鏡割りで祝賀会の幕が開けられました。その後、カモーン・カレッジのドーン・サザーランド・ディレクターから、心温まるお祝いのスピーチを頂戴し、祝賀会に花を添える事になりました。また、真理大学の葉能哲学長より掛け軸二本が寄贈されました。葉学長直筆による「城」と「西」から始まる書の掛け軸で、そ

米国スperlマンカレッジ サマースクール

2005年5月15日(日)～6月11日(土)
城西国際大学 東金キャンパス

5月15日、今年もアメリカジョージア州アトランタから、サマープログラムに参加するスperlマンカレッジの学生14名(男子4名・女子10名)が来日しました。4週間に及ぶ滞在期間中、城西国際大学にて日本語の勉強はもちろんのこと、少林寺拳法や剣道、茶道、生け花などの様々な日本文化に関わるアクティビティーやレクチャーに参加して、日本への理解と知識を深めました。



前に行われた日本の家におけるマナー実践授業では、慣れない日本語と日本独特のしきたりに戸惑いを感じ、不安気な様子も見せてはいましたが、月曜日には満面の笑みを湛えて、誰もが「楽し



の見事な筆遣いに会場からは感嘆の声が上がっていました。

祝賀会も終わりに近づいた頃、東西大学の張聖萬理事長より日本語による祝辞を頂き、学校法人城西大学と各姉妹提携校との今後の発展とさらなる親交を深めるために、重要で充実したお祝いの席となった40周年記念祝賀会は、無事に幕を閉じました。

ご出席いただいた姉妹提携校の代表の方々には、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

かった！」と日本語で感想を述べていました。このサマープログラムは日本語能力の上達と、日本の伝統・文化・知識を深めることが目的となっていますが、異国文化に戸惑い驚きながらも新たな発見をすることで異文化交流に対する自信となったのではないかと思います。

様々な想い出と貴重な体験をお土産に、6月11日に帰国の途に着きました。



中国アカシア懇談会・大連理工大学訪問

2005年6月7日(火)～6月10日(金)
中国・大連市

城西国際大学副学長・石田 益美
城西大学経済学部教授・新田 光重

6月7～10日の4日間、第15回中日アカシア懇談会への出席と大連理工大学との提携交渉を目的として、本学の村井隆相談役(大連市名誉市民)、城西国際大学の石田益美副学長、城西大学経済学部の新田光重教授が中国大連市を訪問してきました。

到着直後、大連市の第16回「キャノン杯」日本語弁論大会を参観しました。大連市の日本語人口は10万人程度で、市内の17の大学には全て日本語専攻が設けられており、日本語を教える中学、高校も多いとの事でした。同大会には、日本語専攻の大学生2,293名を中心におよそ3,000名がエントリーしており、大連市での日本語学習熱の高さに、とても驚かされました。

8日は、中日アカシア懇談会に出席しました。同懇談会は1989年の天安門事件後、日中関係の早期修復を目的に開催されるようになりました。この懇談会はキャノンや東芝をはじめとする大連市進出日系企業代表と大連市政府との懇談会です。今年度は日本側講演者に加えて、夏春玉東北财经大学副校長と新田教授がアカデミズムの側面から大連市に政策提言を行うという形で実施されました。新田教授の講演は「新大連経済圏の展



大連市第16回「キャノン杯」日本語弁論大会

望」と題して、中長期的な観点から地域におけるイノベーション・システム構築の重要性について指摘しました。夏徳仁大連市市長は、東北财经大学校長(学長)を経て市長に着任した経済学者で、新田教授の講演内容に強い関心を示されました。また、同席の夏東北财经大学副校長から、同大学との提携についてのオファーを受けました。

9日は、大連理工大学を訪問して、林安西学長と杜鳳剛外国語学院院长に面会し、大連理工大学の近況や提携方針について伺いました。その後、外国語学院日本語学部の学生約

日韓次世代学術FORUM

2005年6月25日(土)、26日(日)

韓国・釜山、東西大校
引率・城西大学大学院経営学研究科研究科長・経営学部教授 大島 卓

日韓次世代学術FORUMは、人文社会分野において日韓両国の新たな時代を担う次世代研究者に研究発表と相互交流の場を提供することにより、両国のこれらの分野における研究活動を底上げし、更なる活性化を目指すことを目的として開催されています。



朴東順総長

日韓次世代学術FORUMは今回で第2回になり、2005年6月25日、26日の日程で国際学術大会が韓国・東西大



大連理工大学の林学長と村井顧問

はきわめて高い事を実感し、驚きました。講演終了後、杜外語学院院长と本学との教育・学術交流について懇談しました。その中で、交換留学を主として、インターンシップやeラーニング教材の交換を含む具体的提携案を検討する旨確認しました。

60名を対象にした講演「日本の企業者政策」を実施しました。用意した講演原稿は読まず、アドリブで学生を指名して質問してみると、日本語で明晰な返事が返ってきました。同大の学生の日本語能力



本学の大学院生

校にて開催されました。参加者は本学の大学院生6名を含む日韓両国の大学院生約300名が参加しました。

発表形式としては、テーマによって大きく9つの分科に分けられ、その中でさらに8つのグループに分けられました。各グループは発表者1名と討論者8名で構成されて、30分間の制限時間の中で発表者の学問的な関心事や研究テーマに



東西大学研究生との記念撮影



大会とレセプションが行われ、26日は調査旅行が実施されました。国際学術大会では、発表者となる学生数を両国でほぼ同数にし、言語によるコミュニケーション障害を防ぐべく、通訳を万全な体制で整えるなど、細やかな配慮がなされていました。その他にも、1泊2日という短い期間で、両国の学生同士の交流を円滑に進めるため、様々な工夫が施されていました。その為、本学の参加者の報告では、研究分野の知識を深めただけでなく、韓国の文化に対しても多くの影響を受けたという感想が目立っていました。

日韓次世代学術FORUMは、第1回・第



対して、グループで討論を行うという形式で行われました。本学参加者のうち、1名が発表者、3名が討論者、2名は一般参加者として大会に参加しました。(第1回では2名が参加し、発表者1名、討論者1名)

25日は国際学術



2回とも東西大学校がホストとして運営と会場提供を行っていました。第3回は日本での開催が予定されています。今後、日韓の大学院生の交流活動は益々活発になる事が予想されます。そうした中で、本学としてもより一層両国の研究者が深く関わりあえるように努力していく事が重要と考えられます。

コミュニケーション・インターンシップ in 韓国

2005年9月7日(水)～9月13日(火)

韓国・ソウル

引率：城西国際大学語学教育センター 助教 林 千賀

本学では、国際交流の機会に大変恵まれており、キャンパス内はもろんの事、キャンパス外においても様々な異文化交流のプログラムがあります。その1つとして、韓国での「コミュニケーション・インターンシップ・プログラム」があります。



これから実習がんばりまーす。

2005年9月7日から13日までの7日間にわたって行われた本プログラムに、人文学部の学生4名が参加しました。今回はソウル市内の高等学校(端草高等学校)とアゲハ日本専門アカデミーにおいて、日本文化の紹介及び文化交流と日本語教育実習を目的として実施されました。

このプログラムで4名の学生達が実際にどのような交流を体験し、いかなる成果を得たのか、その一部をご紹介します。

高等学校では、主に日本の文化紹介を通じて、韓国の高校生たちと交流をはかりました。日本の文化を紹介



高等学校でなされたデモンストレーション(コテツ! ツキーツ! スネツツ! などのかけ声をいっしょに練習)



端草高等学校 鄭校長先生と共に

介するためには、まずそれを再認識する必要があります。これは他国を知る前にまず自国の文化を改めて意識する事が、国際人の育成にとっては必須条件であると考えたからです。

学生たちには事前講義で、日本のどのような文化を紹介したいのかを課題として与えました。その結果、学生たちが選んだ紹介する日本文化のテーマは「薙刀の紹介」、「着物の着付け」、「日本の古いおもちゃの紹介(福笑いなどの伝承遊び)」などでした。また紹介をする時も、簡単な日本語のみでの説明では不十分である事から、大きな模造紙に描いて



高校生にJIUキャンパスライフを紹介しました。



時間についてのコミュニケーションゲームを行いました。

しかし、今回参加した学生たちは、7日間の研修を通してその事に気がつき、どのぐらいの語彙や文法なら理解してもらえるかという基準が理解できた事は、彼らにとっても大きな成果であったと思います。また、様々な文化交流を通じて、日本語を学ぶ人々を今まで以上に深く理解できるようになったのではないでしょう。そうといった意味でも、非常に実りのある研修であったと言えます。

この他にも、本学主催による「日本語スピーチ大会」での交流会や、アゲハ日本専門アカデミーでの日本語学習者たちとの交流会を行いました。このように様々な文化交流を体験したことで、このプログラムに参加した学生たちは、「初級日本語学習者と日本語で話す時には、語彙や文法項目のコントロールを



高校生に浴衣の着方を教えました。

わかりやすくなり、ジェスチャーを交えたりする事で、見た目にもわかりやすい「体験参加型」の文化紹介を行いました。韓国の高校生たちには大変好評で、積極的に本学の学生が用意したテーマに参加して、多くの質問も挙がりました。3つの高等学校をまわり、全体で6コマ程度の授業を行いました。研修の後半には、本学の学生たちは「わかりやすい日本語」で上手に説明する事ができるようになっていました。

しなければ、うまくコミュニケーションができません。」という事を認識する事ができました。最終的に、彼らがそのことに気づいてくれた事が、大きな成果であったといえます。学習者のレベルにもよりますが日本語学習者と話す時、我々が日常会話で使っている日本語は使う事はできません。日本語学習者がわかりやすいように、語彙や文法を調節して意思疎通を図る必要があります。これを「フォリナートーク」と称しますが、外国人との会話に慣れていない人は、それがうまくできません。



茶道教室で全員がチマチョゴリを着て茶道とその作法を学びました。

米国ビジネス・インターンシップ

2005年9月8日(木)～9月24日(土)

アメリカ・カリフォルニア州・リバーサイド

ネバダ州・ラスベガス

ワシントン州・シアトル

引率：城西大学経営学部副学部長 教授 龍 慶昭

「一度はアメリカの家庭でホームステイをしてみたい」、「アメリカの大学の授業はどのようなモノか体験してみたい」、「将来のためにアメリカの企業やビジネスを見ておきたい」、「ついでにカリフォルニア、ラスベガス、シアトル観光もしなくては」といった個人では到底実現できないような欲張った希望を一度に実現することができるのが、城西大学・城西国際大学で実施している米国ビジネス・インターンシップです。

レキ・ギターの名門フエンダー(Fender)などの企業を訪問して、幹部経営者による講義と活発な質疑応答、その後の各企業内や工場の見学などが行われました。普段では絶対に見たり、聞いたことのないアメリカ企業



17日間の日程の中には、アメリカ人の家庭にホームステイをしながら、午前中はカリフォルニア大学リバーサイド校(UCR)での講義、午後は企業訪問、土日にはバスツアーと自由行動、最後はネバダ大学やラスベガスとシアトルでの研修といった盛りだくさんのプログラムが用意されています。



大手スーパー・マーケットであるラルフス(Ralphs)の物流センターと実際の店舗、衛生・清掃用品の会社ワキシー(Wackie)、エ

訪問先は企業だけでなく司法と行政の現場にも及びました。伝統と荘厳さが威厳を醸し



た。

出すりバーサイドの州高等裁判所では、実際の法廷を見学する事ができました。ここでは、黒衣をまとった裁判官自らが米国の司法制度について語ってくれました。

場所をリバーサイド市庁の議事堂に移し、そこで私たちが歓迎してくれたのは、UCRの政治学の教授でもあったラブレッジ市長でした。市長は私たちに行政マネジメントについてご教授してくださり、市長に直接ご教示いただくという通常では絶対にありえない経験をしました。

本プログラムではアメリカの文化について学ぶ事も忘れてはいません。ロサンジェルスのリトル・トーキョーにある日系アメリカ人博物館では、故郷を遠く離れてアメリカで生き抜いてきた日系アメリカ人の物語を聞く事ができました。

彼ら日系アメリカ人にとって、日本もアメリカも祖国です。その祖国が戦争を始めてしまった時の苦しみと悲しみ、そして戦後、両

国の架け橋になろうとした人々の思いについてのお話をいただき、国際化が叫ばれる今、日本人としての意味を考えさせられるものでした。

モロンゴ・インディアン・リザーベーション（アメリカ・インディアン保留地）にも赴き、インディアン文化についてレクチャーを受けました。「インディアンは自分より先に存在する全てに敬意を表して大切にします。親や自然に感謝し恵みを感じながら生きています。」、「インディアンを支配する事はできないのです。なぜなら支配者のノドを食いちぎるからです。つまりオオカミと一緒になのです。オオカミは人間の家畜には絶対になりません。」と誇らしげに語る彼らに、民族文化の誇りを垣間見ました。

その他にも、サン・ファン・カピストラーノ伝道所を訪れて、カリフォルニアの歴史を振り返り、カリフォルニア州のアイデンティティを知る機会を得ました。

UCRでの講義も有意義なものでした。コーポレート・ファインانسや異文化間コミュニケーションの方法、顧客満足を獲得するためのサービスについてなど、日本ではなかなか聞く事ができない素晴らしい講義でした。

多忙なスケジュールでしたが、レクリエーションも欠かしてませんでした。ビバリーヒルズやロデオドライブでは、高級品店が立ち並び中を散策したり、ビーチでは海で遊ぶだけでなく、現地の人とバスケット・ボールで交流したり、レストランなどでは、食べきれそうもない量のメニューに驚いたり、充実したものとなりました。

学生には、ホームステイも忘れられない思い出となったはず。短い間だったにもかかわらず、見送りの時には涙する学生も見受けられました。

プログラムの最後を飾り、ラスベガスのホ



テルにて本プログラムの修了証がカリフォルニア大学より授与されました。学生は非常に感激していました。

米国ビジネス・インターンシップは今年で3回目を迎えて、社会人大学院生も参加するなど、質、内容ともに魅力的で素晴らしいプログラムに成長してきました。将来、アメリカへの留学を考えている学生、就職を前に世界の企業を見ておこうという学生、あるいは国際的なビジネスを構想している学生にはぜひ参加していただきたいプログラムです。



日露教育交流会開催

ロシアの大学学長との教育交流

2005年9月21日（水）

学校法人城西大学 東京紀尾井町キャンパス

2005年9月21日（水）午後2時から午後4時まで、ロシアの大学学長総勢26名が学校法人城西大学東京紀尾井町キャンパスを訪問され、城西大学、城西国際大学教員との教育交流会をもちました。

最初に本法人理事長水田宗子より、「このように多くのロシアのさまざまな大学の学長をお迎えすることができ大変うれしく思っています。また、今日は、率直な意見交換の場として今後の両国ならびに私どもの大学との交流のかたちを語り合いたいと考えていま



ロシア教育代表团



す。」という歓迎の挨拶がありました。

それをうけ、ロシア教育代表団の団長を務めておられますModern Academy for the Humanities学長のミハエル・カルペンコ先生より、

「今日は、快くお招きいただきましてありがとうございます。ロシアは広大な国なので、遠隔授業としてeラーニングに興味がありまして、こちらはその先端の技術をお持ちだということで、大変楽しみにまいりました。是非、勉強させていただきたいとの挨拶がありました。

その後、前ロシア大使の都甲岳洋氏が、日露交流の歴史をひもときながら、大きな視点での交流の意義についてお話をくださいました。

お互いの紹介ののち、早速教育交流会となり、城西大学・城西国際大学との交流や提携



遠隔授業のデモンストレーション



懇親会会場

の可能性、そしていま世界的に広がっているインターネットを使つての学位取得であるとか、遠隔授業のことなどについての率直な意見交換が続きました。

特にロシア側の興味が高かった遠隔授

業については、引き続いて行われたキャンパス見学会において紀尾井町キャンパスと城西国際大学を結んだ授業の様子を体験していただき、ロシアの方々からは、口々にその便利さや画像の美しさ、音声のクリアなところなどに感激し、是非ロシアでもやっていかなければとの感想が聞かれました。

最後に、レストランで懇親会が開催され、おほかで明るいお国柄のロシアの方たちと楽しいひとときを持つことができました。

大連理工大学より総長来学

2005年10月1日（土）

学校法人城西大学 東京紀尾井町キャンパス

10月1日（土）、東京紀尾井町キャンパスに中国大連市に所在する大連理工大学総長が来学されました。

来学されたのは、大連理工大学公務委員会



主任・同大総長の林安西先生と、外国語学院院长・外国語学部長の杜鳳剛先生のお二方でした。

同大は中国屈指の理工系総合大学で、大連名誉市民でもいらつしやる村井隆先生（日中協会顧問及び本学顧問）のご仲介をいただき、このたびの訪問が実現しました。

今回の訪問では、同大と本学が交換留学、編入学、短期プログラム及び研究者交流等を柱とした正式な学術交流協定を締結する事を目標として、協議を続けてゆくことを確認しあう「意向書」の取り交わしが行われました。今後、両大学における学術協定締結に向けた活発な調整が進められる予定です。

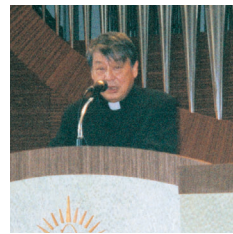


真理大学創立40周年記念式典出席

2005年11月5日(土)

台湾・淡水／麻豆 真理大学

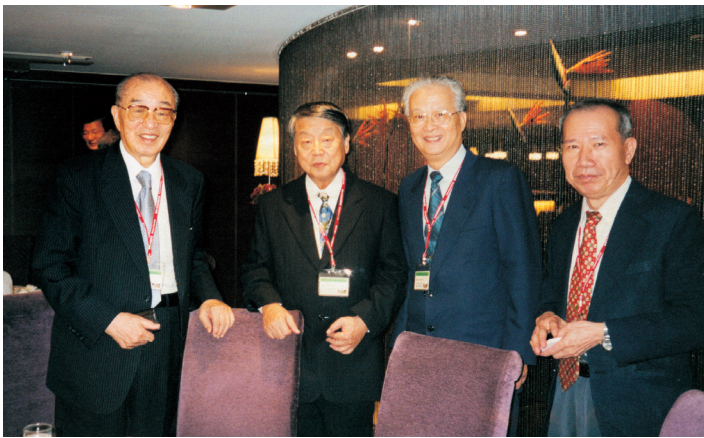
城西国際大学副学長・宇野 政雄



葉能哲 真理大学学長

本学姉妹校である台湾の真理大学は、今年で創立40周年を迎え、その記念式典が11月5日におこなわれました。

本学からは学校法人城西大学常務理事で城西国際大学副学長の宇野政雄副学長が出席して、水田宗子理事長の祝辞を葉能哲真理大学学長にお渡しするとともに、他の同大姉妹校



葉能哲学長（左から2番目）と宇野副学長（左端）



記念コンサートの様子



張家宜学長と森本副学長

田塾大学長夫妻、京都橘大学長、駒沢大学学長、長崎外国語大学理事長、電気通信大学教授の姿もあり、林文通教育部国際文教処長と陳山龍淡江

淡江大学創立55周年記念式典出席

2005年11月7日(月)、8日(火)

台湾・台北 淡江大学

城西国際大学副学長・森本 雍憲

の来賓とともに式典に臨みました。式典は真理大学の麻豆キャンパスで行われましたが、キリスト教の大学らしくキャンパス内に設けられている礼拝堂において、厳かな雰囲気の中で行われました。

その後、100名以上の学生が演奏する記念コンサートが開かれ、学生の父母や近隣の市民も参加しての楽しい一時となりました。コンサート後に開かれた夕食会は、1,000名ほどの来賓が集って盛大に挙行されました。

今回の訪問期間中、真理大学から本学に交換留学生として在学していた学生たちとも会うことができ、本学での楽しい留学生活の思い出話があることはありませんでした。



2005年11月7、8日、台湾台北市におきまして淡江大学創立55周年記念式典が挙行され、学校法人城西大学水田宗子理事長の名代として城西大学の森本雍憲副学長が出席しました。

大学応用日本語系副教授が、日本側のエスコートをしてくださいました。

この晩餐会において、馬朝剛淡江大学学術担当副学長、陳惠美淡江大学英文系副教授、彭春陽淡江大学日本語文学系副教授ともお話をすることが出来ました。



森本副学長と淡江大学留学生

晩餐会終了後、張建邦博士と張家宜学長にお祝いを申し上げると共に、水田理事長の親書とお祝いの品物を差し上げました。大変に感激した様子であり、水田理事長へのお礼の言葉をいただきました。

8日午前10時より、記念式典に出席した海



林雲山元学長と森本副学長

外からの来賓による陳水扁總統への表敬訪問をおこない、歓迎の挨拶と陳總統を囲む記念写真の撮影がおこなわれました。その後、式典参加者との昼食会がもたれて、昼食会後に散会となりました。

同日午後、淡江大学の林雲山前学長を訪問しました。林前学長は、本学との交流に多大な貢献をされた方であり、久しぶりに本学よりの訪問を受けたことで入魂の間柄にあります。水田宗子理事長、水田清子名誉理事長を始めとして城西大学の昔日の思い出を懐かしく話されました。

大学構内を案内していただいた時に、林前学長から機会があればぜひ城西大学を訪問したいとの話をいただきました。是非お出でくださいとお誘いして別れを告げましたが、バスストップまで私共を案内し、発車するまで見送っていただき、名残惜しいような風情であつたのが印象的でありました。

夜、台北市内で城西国際大学、城西大学へ留学していた同窓生8名と懇談する機会を持ちました。現役の学生が2名おりましたが、6名は日本語を生かして立派な社会人として活躍しており、本学が果たしている役割の大きさを実感しました。台湾城西交流会のような卒業生ネットワーク作りの話になり、彼らも前向きに取り組んでくれるとのことでした。本学でもネットワーク作りに積極的に取り組むべきであることを実感しました。

*城西大学、城西国際大学は、1994年に淡江大学との間で日文系学生の留学派遣に関する協定を結んでおり、学生の相互派遣が継続して行われている。

国際シンポジウム

「21世紀アジアと日本の大学と人材開発」

2005年2月14日(月)

学校法人城西大学 東京紀尾井町キャンパスB1Fホール

パネリスト…張 済国(東西大学、国際関係大学院教授)

黄 深勲(龍華科技大學管理學部教授、中華中小企業研究發展學會理事長)

大坪 檀(静岡産業大学学長)

張 紀濤(城西大学経営学部教授、中国世界経済学会理事、江蘇省海外交流協会理事)

司会…渡辺好章(城西大学副学長)

主催…城西短期大学

城西大学創立40周年、城西ベースカレッジ発足、および東京紀尾井町キャンパス開設を記念して、2005年2月14日(月)東京紀尾井町キャンパスB1Fホールにおいて、関係各位の絶大なご支援をいただき標記シンポジウムが盛大に開催されました。

(1) 問題意識とテーマの意味

大学間グローバル競争の激化と旧態依然とした大学淘汰の大混乱期に、近隣アジア諸国の大学事情はどうなっているのでしょうか。産業構造や人口構成の変容、国際情勢や地球環境の変動に対処するために、21世紀アジアにおける日本の高等教育機関はどのようにあるべきなのでしょうか。こうした疑問が、シンポジウムの根底に流れる問題意識であり、

テーマの意味です。

(2) パネリスト

パネリストには、東西大学・国際関係大学院教授・国際協力委員長の張済国氏、静岡産業大学学長の太坪檀氏、元台湾国立空中大学学長の黄深勲氏、城西大学経営学部教授の張紀濤氏をお招きしました。

(3) 各国大学事情の現状と問題点(前半)

各国に共通している問題点は、大学間過当競争による合併や淘汰、量的拡大による質的低下、卒後の就職難と不安定性などがあげられます。根本的原因は大学を卒業しても、先行投資に見合う、相応の就職先が保証されないことにあります。

(4) 21世紀大学間グローバル競争、人材開発など(後半)

21世紀の大学事情の潮流分析と現実的対応策について、パネリストよりそれぞれ10項目前後の説明がありました。わが国の大学の将来について総括すると、次の箇条書きに要約できます。

1. 人口対策(入学試験)より、出口対策(就職斡旋)に大学の課題は移行する。「売り手市場」から「買い手市場」へ需給関係が逆転したためです。特に韓・日・台で顕著です。そうなれば、学生個人のニーズに合致した「良い企業への就職」を意図した、標準的市場の細分化とカリキュラムの差別化は必然となります。就職に有利となれば、海外留学が大量に発生するでしょう。

2. 教育機会のグローバル化で、文部科学省の教育制度規制は維持できない。

文科省の国立大学偏重「護送船団方式」は通用しなくなります。中央教育審議会は「わが国の高等教育の将来像」(2005年1月28日)において、文科省の役割は「高等教育計画と各種規制」の時代から、「将来像の提示と政策誘導」の時代に移行すると宣言しています。

3. その結果、大学経営体制が革新される。



渡辺 好章副学長



張 済国氏



黄 深勲氏



張 紀濤氏

国立大学の独立行政法人化がその証拠です。私立大学に要求されるのは、自己責任と教育効果の評価です。私立大学が旧弊を捨て、近代的な意思決定のできる組織に脱皮することです。理事会が大学経営に責任を持ち、機動的な意思決定のできる体制をつくり、個性を持って、自らの知恵で生き残らなければなりません。近い将来、プロのマネジメントによる大学経営が主流になるでしょう。

4. その結果、学年別カリキュラム制度が革新される。

海外姉妹校との交換留学や単位互換、学位認定などが始まっていますが、単位の「デボジット制」も徐々に始まっています。eラーニングが質量ともに充実し、生涯教育が重視されるでしょう。特に、社会人のステップアップとなる専門職の資格取得講座に人気が集まるでしょう。そうなってくると、現在の4年生大学は空虚で効率が悪くなります。優秀な学生を短期集中的に学習させ、早く社会で活躍してもらった方が国益になると思います。そうなると、大学は根底から崩れるかもしれません。

「日本はいま不況期にあるのではない。転換期にあるのだ。明治維新と戦後の社会革新を上手に乗り切ったように、日本は必ず第3のソーシャル・イノベーションを完成させるだろう」とピーター・ドラッカーは予言しています。日本の正念場はあと5年続くでしょう。



大坪 禮氏

アテネオ・デ・マニラ大学からの交換留学生

フィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学から3人の女子学生が到着したのは、9月末でした。アテネオ・デ・マニラ大学は国際交流学科長アマデオ・アルボレーダ先生の出身校で、交換留学生はみな、ビジネス専攻の3年生です。

到着した翌日に、さっそく日本人学生（国

際交流学科1年生）が歓迎会を開いてくれました。小向先生が担当する「英語集中特訓プログラム」のクラスの学生28人が、折り紙をいっしょに折ったのです。3人の感想は、「JIUのキャンパス・ライフをスタートするのに役立つ経験でした。勉強になるだけでなく、so much fun! とても楽しかった!」

3人の留学目的は、日本語習得が第1で、第2が日本文化を知ることです。JIUへの交換留学生は、ほとんどが中国や台湾、韓国などの漢字圏から来ていて、主に別科で日本語を勉強しています。ところが、フィリピンからの3人とスペインのバルセロナ大学からの1人は非漢字圏出身者なので、10コマの日本語特別クラスが編成されました。語学教育センターの林千賀先生、原やす江先生が中心になって、日本語を基礎からしっかり教えてくださっています。

異文化間コミュニケーション（綾部先生・国際関係論（サマター先生）・出版文化論（学科長）などの、英語による授業も履修しています。フィリピンの大学は、すべて英語で授業が行なわれるため、3人の英語運用力はきわめて高く、「日本文化体験プログラム」担当の那須先生は毎回提出されるレポートの優れた英語の文章に感嘆しています。

マニラからの交換留学生が参加しているプログラムは「交換留学生のための日本文化体験特別プログラム」で、これはプロジェクト教育の1つとして実施されています。前述した「英語集中特訓プログラム」との共催3回も含めて、全部で10回の授業があり、その内容は、以下のようになっています。



第6回プログラム茶席体験

第1回…「折り紙交流会」（英語集中特訓プログラムとの合同）

第2回…唐津焼展示会見学・茶席・日本料理（観月の点心）

第3回…「和の響き」竹細工・袋物などの展示会・日本刺繍工房見学・体験講座「とんぼ球」

第4回…日本民謡・民舞全国大会（日本武道館）・東京見物

第5回…どらみたらしパーティー（英語集中特訓プログラムとの合同）

第6回…茶室建築・庭園・旧家見学、茶席体験

第7回…生け花教室（経営情報学部鳥崎先生と）

第8回…比・西・中・台・韓・日・対抗かくし芸大会・英語集中特訓プログラム、

LL基礎英語との合同）

第9回…文楽鑑賞教室（国立小劇場）

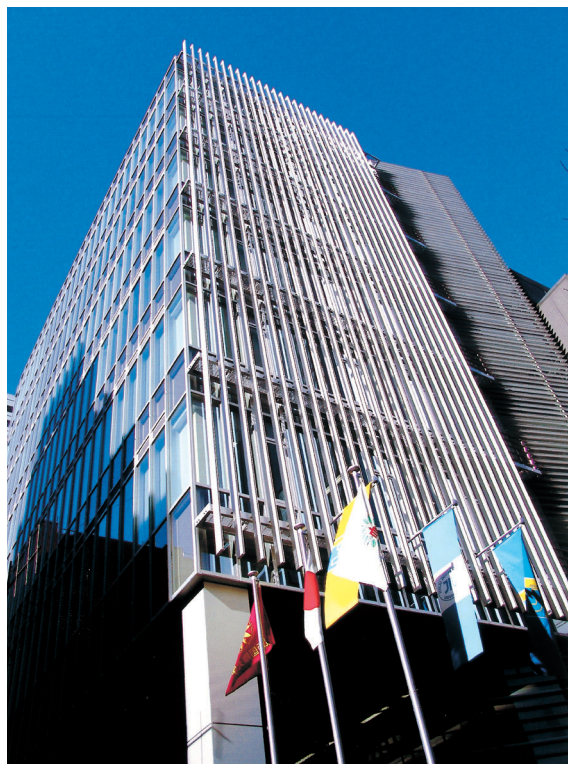
第10回…大相撲初場所

●周辺図



アクセス インフォメーション

- 地下鉄有楽町線 有楽町駅 1番出口より徒歩3分
- 地下鉄南北線 永田町駅 9番出口より徒歩5分
- 地下鉄丸の内線・銀座線 赤坂見附駅 分慶口より徒歩8分
- JR中央線・総武線 四谷駅より徒歩10分



JIUの学生による課外活動にも関心があり、茶道・剣道・映画部などに体験入部しました(このときは、綾部ゼミ・那須ゼミの学生たちが通訳としてサポートしました)。学園祭には、異文化交流研究会の民族衣装ショーに出演したり、「フィリピン展」を出展したりしました。

また、国際教育センター主催の「週末ホームステイ」に参加し、アパートでは味えない素晴らしい体験をしました。他にも、愛用していた自転車のメインテナンスでお世話になった東金市民のお宅で、手づくりのソバを

「JIUコミュニティの皆様に、あたたかく歓迎していただき、日本文化を最高の形で体験させてくださったことに御礼を申し上げます。」

最後に交換留学生からのメッセージです。
 “We would like to thank the JIU community for giving us a warm welcome and allowing us to experience Japanese culture at its best.”



ヴィヴィアン・ヴェントラさん



カミール・アバさん



ロレイン・ゴンザレスさん

バルセロナ自治大学からの交換留学生

今年も本学姉妹校であるスペインバルセロナ自治大学より、交換留学生1名が城西国際大学に來学しました。



ジョルジーナ・ペレス・ブラボさん

彼女の名前は、ジョルジーナ・ペレス・ブラボ(GEOGINA PEREZ BRAVO)さん。バルセロナ自治大学でジャーナリズムを学ぶ4年生です。

以前より日本のアニメや音楽に興味を持っていた彼女も、初めて体験する日本での生活には何かと不安もあったことですが、すでに日本の友人も何人か出来はじめて、順調な留学生生活を過ごしているようです。

今後、日本語を中心とした勉強を続けながら、2006年7月末まで城西国際大学に在学する予定となっています。

学校法人 城西大学



城西大学／城西短期大学



城西国際大学

〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町3-26 TEL.03(6238)1300

学校法人 城西大学 <http://www.josai.jp/>

城西大学 <http://www.josai.ac.jp/> 城西国際大学 <http://www.jiu.ac.jp/>

学校法人 城西大学 国際学術文化振興センター

〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町3-26

TEL 03(6238)1300 FAX 03(6238)1299